

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 13 日現在

機関番号：14201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884033

研究課題名(和文) モース以後の贈与論の再検討と贈与の思想史の構築

研究課題名(英文) Historical reconsidering of Mauss's heritage and the idea of gift

研究代表者

藤岡 俊博 (Fujioka, Toshihiro)

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：90704867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、フランスの民族学者マルセル・モースが中心となって主題化した「贈与」の概念が、20世紀の人類学でどのように継承されたのか、またフランスの現代思想において贈与がどのような仕方で哲学的な考察対象となったのかを再検討することにある。その際、モースの知的遺産をさまざまな仕方で引き継ぐ「MAUSS」(社会科学における反功利主義運動)にも着目することで、人類学および哲学で個別に扱われてきた研究を思想史的観点から架橋することを試みた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reconsider how the idea of "gift" thematized mainly by the french ethnologist Marcel Mauss was taken over by anthropologists in the 20th century and became also an object of philosophical inquiry in the contemporary french thought. We look closely at the studies of "MAUSS" (Mouvement Anti-Utilitariste dans les Sciences Sociales/Anti-Utilitarian Movement in the Social Sciences) involved in different ways with Mauss's intellectual heritage in order to bridge the gap between anthropological approach and philosophical one in the perspective of history of ideas.

研究分野：西洋思想史

キーワード：贈与 モース MAUSS

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀初頭にプロニスワフ・マリノフスキーやマルセル・モースといった民族学者によって提起された「贈与 gift/don」の概念は、クロード・レヴィ=ストロースらの戦後の人類学・社会学に継承される一方で、ジョルジュ・バタイユ、エマニュエル・レヴィナス、ジャック・デリダ、ジャン=リュック・マリオンらのフランス哲学・思想の領域でも独自の理論的發展を経験した特異な概念である。本研究は、フランスにおける贈与論の最新の展開である「MAUSS」運動(社会科学における反功利主義運動)にも着目しながら、人文社会科学の両分野で個別に扱われてきた贈与の概念および主題を思想史的観点から通覧するための基盤を提供することを企図するものである。

(2) フランスの民族学における贈与研究の嚆矢であるマルセル・モース『贈与論』(1925年)は、贈与を共同体間の象徴的な「交換 échange」として再解釈するレヴィ=ストロースによる批判を受け、重要な先駆ではあるが今日ではすでに有効性を失った研究という地位を与えられてきたが、その後、記号論的解釈から実体的な贈与論への引き戻しの必要性を提起するモーリス・ゴドリエ、贈与論にジェンダーの観点を導入したアネット・B・ワイナーらによる新たな展開を経てふたたび注目を集めはじめている。これらの研究は、モースにおいて看過されてきた贈与の連関における「保持」の契機に着目し、譲渡不可能な所有物が生み出す社会の安定性こそが贈与を可能にすると主張した点に特徴があった。それに対し、フランスの社会学者アラン・カイエが主導する「MAUSS」は、モースの「与える・受け取る・返す」という三重の不可分の義務を全体として重視し、経済中心主義的な単一思考から脱却した社会科学の構築を目指すことでフランスにおけるモース再読の機運を高めた。日本国内でも、従来から行われてきた人類学のフィールドでの独自の贈与研究に加えて、モースの著作自体をさまざまな視点から再評価する作業が行われている(モース研究会(編)『マルセル・モースの世界』、2011年など)。

(3) 他方で「贈与」の概念は、生産消費サイクルに基づいた「限定経済」と生産に再回収されない「蕩尽 dépense」の概念を軸に「普遍経済」を構想したバタイユ、モースの贈与は依然として「経済(エコノミー)」の円環に囚われたままであると批判して「不可能なもの」としての贈与を論じたデリダ、現象学の立場から独自の贈与概念を打ち出したマリオンらに継承されて、現代のフランス哲学における一つの重要な考察対象となっている。また、直接的にモースを参照してはいないものの、他者への自己贈与として定式化さ

れうるレヴィナスの倫理思想も、広い意味での哲学的贈与論の系譜に位置づけることができる。哲学における贈与論の議論の展開についてはマルセル・エナフらによる先行研究が行われている(Marcel Hénaff, *Le don des philosophes*, 2012, etc.)。

(4) しかしこのような人類学的研究と哲学的研究は、たがいに独立して贈与研究を行っているのが現状であり、広い意味でのモースの知的遺産の総括が有意義な形で行われてきたとは言えない。そのため双方の研究の理論的成果を発展的に共有することで、贈与の主題の包括的な見通しを得るとともに、贈与論というトピックに思想史的な位置づけを与えることが必要となっている。その作業を通じて、先行研究においてしばしば通説化されつつあるモース受容の動向を刷新することができる。

## 2. 研究の目的

本研究は、哲学・人類学・社会学などの諸分野で多様な仕方で主題化されてきた「贈与 don」の思想史の構築を目指すとともに、フランスの現代哲学における贈与論の潮流がどのように形成され、いかなる理論的帰結が得られたのかを明らかにすることを目的とする。その際に本研究は、人類学的調査と哲学的考察との分離を埋め合わせるために、贈与の主題を思想史的観点から多面的に分析することを目指す。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は図書資料をはじめとした各種文献の読解および分析によって行う。具体的な作業項目はおもに以下の4点である。

モースおよびそれ以後の人類学で行われた贈与研究の実証的な成果をまとめ、贈与の概念的彫琢に寄与しうる観点を理論的に整理する。

これらの研究が贈与現象の分析の際に前提とする諸概念を吟味し、当該概念の使用の有効性とさらなる洗練の可能性を哲学の立場から検討する。

モースの贈与論を哲学的問題として引き継いだ哲学者の所論を検討し、モースの主張との相違と、彼らの哲学における贈与の主題の意義を明らかにする。

上記で整理した人類学的研究の新しい知見が、これらの哲学的な贈与研究に活用可能かを検討する。

(2) 以上で得られた研究成果は、学会および研究会の場で公表するとともに、論文ない

し図書の形でまとめる。

#### 4. 研究成果

(1) まず本研究は、モース以後の贈与論の受容史の歴史的整理と再検討を行った。狭義のモース研究は、モース逝去を受けて刊行された論集『社会学と人類学』(1950)の刊行とともに始まると言えるが、そこに付されたレヴィ=ストロースの批判的な序文によって、モースの著作は、新しい社会学に取って替わられるべき過去の研究という位置づけを当初から与えられることとなった。本研究はレヴィ=ストロースによる批判的解釈の意義を検討し直すことを通して、彼が自身のフィールド調査の成果も踏まえながら「交換」の主題に力点を置くことでモースの『贈与論』に伏在する理論的側面への関心を広く惹起し、のちのデリダらによる『贈与論』の哲学的な読解への道を開いたことを示した。『贈与論』で論じられた事物に宿る霊(「ハウ」)を批判する際にレヴィ=ストロースが導入する「浮遊するシニフィアン」の概念が、のちの構造主義/ポスト構造主義の議論のなかで再来することは、レヴィ=ストロースによるモース解釈およびそれ以後の『贈与論』の受容史が、民族学および人類学のトピックに留まらない幅広い思想史的射程を備えていることを示している。

(2) また本研究は、上記の『贈与論』研究の系譜を踏まえ、デリダをはじめとする哲学的なモース解釈の整理・読解を行った。デリダは『時間を与える』(1991年)などで「不可能なもの」としての贈与を俎上に載せている。本研究は、モースが贈与を語る際に用いる円環のモチーフ(車輪、太陽など)にロドルフ・ガシェが早くも注目していたことを指摘し、モースの言う贈与は固有のものを再固有化する過程にすぎないというデリダにも共通する批判の軸線を明らかにした。そしてモースの贈与概念に対置する形でデリダが提示する贈与の無償性を「MAUSS」が批判的に捉えていることを確認したうえで、贈与論を反功利主義に対する肯定的かつ積極的な旗幟とする「MAUSS」の理論的立場を明らかにした。

(3) アラン・カイエをはじめとする「MAUSS」の研究活動が、モースの『贈与論』をつねに重要な参照点としつつも、贈与そのものから「功利的なもの」の批判へと議論の軸足を移すことによって、『贈与論』の受容史上たえず問題となってきた「贈与」と「交換」のジレンマを発展的に解消する視点を提供していることを明らかにした。「MAUSS」の基本的なテーゼは、功利主義をジェレミー・ベンサムやジョン・スチュワート・ミルに代表される思想史上の一潮流のみに縮減せず、プラトンやインド思想にまで思想史を遡って

その淵源を探る 功利主義の古さ と、モースが分析した「未開」ないしアルカイックな社会に限定されない贈与の現在の地位を明らかに出す 贈与の新しさ という二点に集約することができる。本研究はこうした「MAUSS」の議論から着想を得つつ、モースの『贈与論』を個人主義的立場と全体論的立場という対立のなかで捉え返すことで、『贈与論』を従来よりも広い思想史的な布置のなか位置づけることを試みた。具体的には、限界革命以降の社会科学のミクロ化の過程、メンガー(オーストリア学派)とシュモラー(歴史学派)による「方法論争」、デュルケームとタルドの論争といったさまざまな思想史的トピックとの関連で『贈与論』を再読しその意義を再検討する可能性が本研究によって開示された。

(4) 現代フランス哲学における贈与研究の一環として、歴史的研究がいまだ不十分であるエマニュエル・レヴィナスの哲学の思想史的位置を特に人類学・社会学との関連に着目して明確にしなから、レヴィナスの贈与論の核となる「歓待性 *hospitalité*」の思想をレヴィナスの「場所 *lieu*」概念から導出した。とりわけレヴィナスのパウル・ツェラン論「パウル・ツェラン 存在から他者へ」(1972年)の読解によって、ハイデガー的な存在の贈与と鋭く対立するレヴィナスの贈与思想が彼の倫理思想において有する重要性を明らかにした。

(5) 現在フランスで刊行が進んでいるレヴィナスの遺稿集のなかから、特にレヴィナスが戦後まもなく哲学コレージュで行った講演「発話と沈黙」(1948年)を取り上げ、この最初期の思想のうちにのちのレヴィナスの贈与論の萌芽を見いだすとともに、最晩年の思想にまで通じるレヴィナスの関心を取りわけ「聴取 *audition*」の概念を軸にして明らかにした。同講演でレヴィナスが論じている「音の現象学」というテーマは、のちのレヴィナスの既刊著作にはその明示的な対応物が見当たらない。しかし本研究は、『実存から実存者へ』(1947年)などの初期著作での「ある *ily a*」の議論、そして同時期のミシェル・レリス論「語の超越 『ピフュール』について」(1949年)との比較検討を通じて、未刊講演「発話と沈黙」の「音の現象学」の議論が「音」と「語」との腑分けへと結実し、のちのレヴィナスの鍵語の一つである「他性 *altérité*」の概念の導入および彫琢に影響を与えていることを明らかにした。さらに以上を踏まえて本研究は、「音の現象学」が他者の聴取というレヴィナス哲学全体の重要な論点を準備していたことを、第二の主著『存在するとは別の仕方である』(1974年)における「語ること *le Dire*」と「語られたこと *le Dit*」の議論を通じて示した。

(6)『贈与論』の最終章で言及されているように、モースの贈与の対抗概念として想定される「利益 intérêt」の概念について、ニコロ・マキャヴェリやフランチェスコ・グイッチャルディーニら近代政治思想の端緒からフランスのモラリスト(ラ・ロシュフコー、ピエール・ニコルなど)そして18世紀の功利主義思想(ベンサム)および経済思想(アダム・スミス)に至るその思想史的系譜を概括的に再検討したうえで、レヴィナスの「無私=脱内存在性 désintéressement」の概念と贈与概念との思想的接続について考察した。それによって、レヴィナスの思想が、事実的なものと法権的なものを峻別したうえで前者に徳の基礎を認める一連の思想史的潮流に対置されうるものであることが明らかになるとともに、レヴィナスの倫理思想が、贈与論をも含む広い思想史的視野のもとに位置づけられる発展的な可能性が示された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計4件)

藤岡俊博「場所の贈与論 レヴィナスと利益の社会思想史」、現代思想におけるトポロジー研究会、2015年3月2日、立命館大学(京都府京都市)

藤岡俊博「聴くことを与える レヴィナスにおける音の現象学」、日仏哲学会・レヴィナス研究会共催ワークショップ、2014年9月12日、東京大学(東京都目黒区)

藤岡俊博「モースから MAUSS へ 「贈与論」の展開」、滋賀大学経済経営研究所定例研究会、2013年11月28日、滋賀大学(滋賀県彦根市)

藤岡俊博「MAUSS 運動と贈与論の展開」、人文社会科学系若手研究者セミナー、2013年7月13日、日仏会館(東京都渋谷区)

〔図書〕(計2件)

藤岡俊博、東京大学出版会、『レヴィナスと「場所」の倫理』、2014年、x+382+113

藤岡俊博 他、知泉書館、『顔とその彼方レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』、2014年、175-188

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

翻訳

藤岡俊博 他訳、法政大学出版局、エマニュエル・レヴィナス『レヴィナス著作集 1』、2014年

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

藤岡 俊博 (FUJIOKA, Toshihiro)

滋賀大学・経済学部社会システム学科・准教授

研究者番号：90704867

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：